

# 小学校における通級指導担当者と通常学級担任との連携の現状 および連携の充実につながる要因の検討

—T県内の通級指導教室担当者を対象とした質問紙調査から—

中村 浩子<sup>1</sup>・和田 充紀<sup>2</sup>

## The Research about the Way of the Experience of the Cooperation in Elementary School with Resource Rooms

— Questionnaire Survey of Resource Room Teachers

Hiroko NAKAMURA & Miki WADA

通級指導教室担当者を対象として、通常学級担任との連携の現状について調査を行った。通級指導教室担当者はそれぞれの都合に応じた頻度で「口頭で」あるいは「児童が行った学習プリント」や「連絡ノート」などを活用しながら、「学習内容」や「児童の様子」「通級での対応」を伝えている現状が示された。一方で、複数の学校と兼務の担当者が多いことや、学級担任との時間の確保が困難であること、児童への支援に対する意識の相違などによる、連携の困難さと課題も指摘された。連携の回数の多いことが連携の満足度につながっていることや、通級指導教室における児童の実態や活動内容の「伝達」にとどまらず「活動の意図や児童の内面の変容などより具体的な児童を支えるための情報共有」を望んでいる結果も示された。負担なく継続的な連携としていくためには、「すぐに」「短時間で」「手軽に」行うことができ、かつ「可視化して」確実に情報を共有できる連携のあり方が求められる。

**キーワード：通級指導教室，通常学級，連携，情報共有**

**Key words：Resource Room，Regular Class，Cooperation，Information Sharing**

### I. 問題と目的

小学校学習指導要領解説（2017）によると、通級による指導とは、「小学校の通常の学級に在籍している障害のある児童に対して、各教科等の大部分の授業を通常の学級で行いながら、一部の授業について当該児童の障害に応じた特別の指導を特別の指導の場（通級指導教室）で行う教育形態である」と明記されている。「令和元年度通級による指導実施状況調査結果について」（文部科学省）からは、通級による指導を受けている児童数、通級指導教室設置学校数（小学校）が年々増加しており、通級による指導の必要性がより高まっていることが読み取れる。また、小学校学習指

導要領解説（2017）には、教師間の連携についても明記されており、学習内容などについて学級担任と通級担当者で情報を交換し、通級での指導が今後にも生かされるような連携が必要とされている。

先行研究では校内の連携の必要性（都築・長田，2016）や自校通級と他校通級での連携の違い（相原・武田，2011）などが明らかにされている。課題としては、「ツールを用いた効果的な協議方法の検討」（岡本，2014）、「情報交換の方法だけでなく、情報交換の内容や収集した情報の活用の仕方の検討」（藤川・石井・落合・佐藤・柳沼・藤井，2015）、「学級担任との直接的な話し合いを確保できる仕組みづくり」（相原・武田，2011）の3点が示唆された。

そこで本研究では、小学校の校内での教師間の連携に焦点を当て、支援体制や連携の実態把握をし、どの

1) 石川県立七尾特別支援学校

2) 富山大学人間発達科学部

ような情報交換の方法や内容、情報の活用の仕方が適切であるのかを検討する。

## Ⅱ. 方法

### 1. 調査対象

T県内公立小学校の通級指導教室担当者を対象とした。

### 2. 調査手続き

2018年8月～9月に、T県内公立小学校191校に質問紙を配布し、郵送により回答を求めた。回収数は119部、回収率は62.3%であった。

実施に際しては、本研究の以下の目的および回答は任意であることについて文書にて説明を加え、無記名にて記入を依頼した。

本調査は、通級指導教室担当者と通級を利用する児童の学級担任との連携に関する基礎資料を得るために実施する。通級を利用する児童数が増え、連携の重要性が唱えられている現在、連携時に教師間で、どのような情報交換、連携が行われる必要があるのかについて検討することを目的としている。

### 3. 調査項目

これまで、通級による指導担当と学級担任との連携についてまとめた先行研究としては先述のとおり相原ら(2011)、藤川ら(2015)がある。今回のアンケートを作成するに当たり、これらの先行研究を参考にするとともに以下の点に留意して、調査項目を選定した。

第一に、回答者について「年齢」「通級指導教室担当歴」「勤務形態」「特別支援学校教諭免許状の保有の有無」「特別支援教育コーディネーターの有無」「特別支援教育を学ぶ機会の有無」を取り上げた。

第二に、勤務校について「児童数」「学級数」「教師数」を取り上げた。

第三に、自校の通級指導教室について「担当している児童数」「児童の主な利用理由」「学習内容(プリント等)」について」を取り上げた。

第四に、学級担任との連携について「連携頻度」「連携方法」「連携時に伝える内容」「連携への意識」を取り上げた。

第五に、連携に望むことについて「望む連携方法」「伝えるとよいと思う内容」を5段階評定で回答を求めた。

以上の検討をふまえて、表1に示すような質問紙を作成した。調査項目は、「1.回答者の概要について」「2.対象者の勤務校について」「3.自校の通級について」「4.学級担任との連携について」「5.連携に望むことについて」の5大項目、22中項目で構成した(表1)。

表1 質問項目と内容

質問項目	質問内容
1. 回答者について	1-1.年齢 1-2.通級担任歴 1-3.現在の勤務校での通級担任歴 1-4.勤務形態 1-5.兼務校数 1-6.自校での勤務日数 1-7.他校での勤務日数 1-8.特支免許状の保有状況 1-9.特支コーディネーターの担当状況 1-10.特支について学ぶ機会の有無
2. 勤務校について	2-1.児童数 2-2.学級数 2-3.教師数
3. 自校の通級について	3-1.担当している児童数 3-2.利用する児童の主な利用理由 3-3.児童の学習内容(プリント等)の保管方法
4. 学級担任との連携について	4-1.連携頻度 4-2.連携方法 4-3.伝える内容 4-4.連携に対する意識
5. 連携時に望むことについて	5-1.連携方法 5-2.伝える内容

### 4. 分析手順

回答ごとに割合を算出して比較した。

自由記述については、内容をカテゴリーに分類した。

### 5. 倫理的配慮

本研究では、調査の目的、調査の回答は任意であることについて口頭と文書で説明した。質問紙を配布し、回答をもって同意を得たこととした。

## Ⅲ. 結果

回答の得られた119校中、通級指導教室あり84校、通級指導教室なし35校であった。ここでは、通級指導教室ありと回答の得られた84校の調査結果について次に述べる。

### 1. 回答者の概要について

#### (1) 年齢について

回答者の年齢は、30代が84人中4人(4.8%)、40代が7人(8.3%)、50代が64人(76.2%)、60代が9人(10.7%)だった。

#### (2) 通級指導教室担当歴について

回答者の今までの通級指導教室担当歴は、5年未満が84人中59人(70.2%)、5～10年が21人(25.0%)、11～15年が1人(1.2%)、16年以上が3人(3.6%)だった。

#### (3) 現在の勤務校における通級指導教室担当歴について

回答者の現在勤務している学校での通級指導教室担当歴は、1年未満が84人中31人(36.9%)、1～3年が43人(51.2%)、4年以上が10人(11.9%)だった。

#### (4)勤務形態について

回答者の勤務形態は、1校のみが84人中19人(22.6%)、兼務が65人(77.4%)だった。

#### (5)兼務について

回答者の兼務している学校数について、1校が65人中35人(53.8%)、2校以上が30人(46.2%)だった。

#### (6)自校の勤務日数について

回答者の自校における週の勤務日数は、週1日が65人中8人(12.3%)、週2日が27人(41.5%)、週3日が21人(32.3%)、週4日が5人(7.7%)、週5日が4人(6.2%)だった。

#### (7)他校の勤務日数について

回答者の他校における週の勤務日数は、週1日が65人中15人(23.1%)、週2日が24人(36.9%)、週3日が18人(27.7%)、週4日が7人(10.8%)、週5日が1人(1.5%)だった。

#### (8)特別支援学校教諭免許状の保有状況について

回答者の特別支援学校教諭免許状を保有状況について、保有している84人中31人(36.9%)、保有していない53人(63.1%)だった。

#### (9)特別支援教育コーディネーターの担当状況について

回答者の特別支援教育コーディネーターの担当状況については、「特別支援教育コーディネーターである」が84人中42人(50.0%)、「特別支援教育コーディネーターではない」が42人(50.0%)だった。

#### (10)特別支援教育について学ぶ機会の有無について

回答者の特別支援教育について学ぶ機会の有無について、はいが84人中84人(100.0%)、いいえが0人(0.0%)だった。

## 2. 回答者の勤務校について

### (1)児童数

全児童数について、100名未満が84校中4校(4.8%)、200名未満が25校(29.8%)、300名未満が27校(32.1%)、400名未満が8校(9.5%)、400名以上が20校(23.8%)だった。

### (2)学級数

学級数について、6学級未満が84校中0校(0.0%)、6～12学級が35校(41.7%)、13～18学級が35校(41.7%)、19学級以上が14校(16.7%)だった。

### (3)教師数

全教師数について、10名未満が84校中1校(1.2%)、10～15名が29校(34.5%)、16～20名が16校(19.0%)、21～25名が16校(19.0%)、26名以上が20校(23.8%)、無回答が2校(2.4%)だった。

## 3. 自校の通級指導教室について

### (1)担当している児童数

通級指導教室で担当している児童数は、5名未満が84校中2校(2.4%)、5～10名が32校(38.1%)、11～15名が26校(31.0%)、16名以上が24校(28.6%)だった。

### (2)児童の主な利用理由

通級指導教室を利用している児童の主な利用理由について複数回答で尋ねたところ、「読むことや書くことに困難がある」が84人中80人(95.2%)、「計算や推論することに困難がある」が73人(86.9%)、「社会的技能やコミュニケーション能力が低い」が69人(82.1%)、「衝動性や多動性がある」が60人(71.4%)、「聞くことや話すことに困難がある」が59人(70.2%)、「その他」が5人(6.0%)だった。

その他としては、「運動の苦手さがある」、「構音障害・吃音」、「不登校」「知的障害(本当は対象外だが通級している)」があげられた。

### (3)児童の学習内容の保管方法について

児童が学習した内容、特にプリント等をどのようにしているかについて複数回答で尋ねたところ、「ファイルにとじて通級で保管」が84人中41人(48.8%)、「ファイルにとじて家庭に持ち帰る」が36人(42.9%)、「ファイルにとじて学級に持ち帰る」が13人(15.5%)、「ファイルにとじていない」が6人(7.1%)、「学習プリントを使用していない」が3人(3.6%)、「その他」が10人(11.9%)、「無回答」が1人(1.2%)だった。

その他としては、「ほとんどノートを使用」、「個別懇談会の折にファイルを見せながら保護者と話す」、「ファイルを通級担当⇔担任⇔保護者(児童含む)で共有している」「ファイルにとじて在籍学級担任と回覧、学期末に保護者に」などがあげられた。

## 4. 学級担任との連携について

### (1)学級担任との連携頻度

回答者の学級担任との連絡の頻度について、毎回行っているが84人中53人(63.1%)、週に1回程度行っているが14人(16.7%)、2日に1回程度行っているが6人(7.1%)、月に1回程度行っているが3人(3.6%)、3日に1回程度行っているが1人(1.2%)、学期に1回程度行っているが0人(0.0%)、行っていないが0人(0.0%)、その他が7人(8.3%)だった。

その他としては、「不定期」、「必要に応じてケース会議を随時開く」などがあげられた。



## (2) 連携時の方法について

学級担任との連携時の方法について複数回答で尋ねたところ、「口頭」が84人中80人(95.2%)、「児童が行った学習プリント」が57人(67.9%)、「連絡ノート」が55人(65.5%)、「教材」が29人(34.5%)、「報告書」が28人(33.3%)、「電話」が8人(9.5%)、「メール」が1人(1.2%)、「その他」が18人(21.4%)だった。

その他としては、「毎時間のメモ」、「学期毎の学習の記録」、「パソコンの共通サーバ」、「個別の指導計画」、「日頃から指導の前に簡単な打ち合わせを、指導後にはその様子を伝え合うようにしている」、「ケース会議又は校内委員会」などがあげられた。

## (3) 連携時に伝える内容について

回答者の連携時に伝える内容が決まっているかについては、「決まっている」が84人中61人(72.6%)、「決まっていない」が23人(27.4%)だった。

## (4) 伝えている内容について

伝えている内容について複数回答で尋ねたところ、「学習内容」が84人中68人(81.0%)、「児童の様子」が68人(81.0%)、「通級での対応」が63人(75.0%)、「使用した教材」が50人(59.5%)、「通級担任の評価」が44人(52.4%)、「児童本人の感想」が32人(38.1%)、「使用した支援ツール」が28人(33.3%)、「児童本人の評価」が20人(23.8%)、「通級担任から学級担任へのコメント」が31人(36.9%)、「学級担任から通級担任へのコメント」が19人(22.6%)、「その他」が13人(15.5%)だった。

その他としては、「児童の思い」、「児童の行動の背景」、「児童の自分への評価」、「特に頑張ったこと」、「児童の変容」、「今後の方針」、「学級担任から児童へのコメント」、「保護者のコメント」、「保護者面談の内容」などがあげられた。

## (5) 学級担任との連携が上手くいっているかについて

回答者の学級担任との連携が上手くいっていると思うかについては、「連携が上手くいっていると思う」84人中57人(67.9%)、「連携が上手くいっていると思わない」25人(29.8%)、「何ともいえない」が2人(2.4%)だった。

## (6) 連携が上手くいっていないと思う理由

連携が上手くいっていないと思う理由について複数回答で尋ねたところ、「時間が確保できないから」が25人中17人(68.0%)、「学級担任が忙しそうだから」が14人(56.0%)、「兼務しているから」が13人(52.0%)、「1日に来る児童が多いから」が8

人(32.0%)、「連携に対する価値観が違うから」が8人(32.0%)、「その他」が4人(16.0%)だった。

その他としては、「対象児の状態や担任によって差がある」、「学級の担任の特別支援教育への理解不足」、「管理職の協力が得にくい」、「通級での学習と学級での学習に隔たりがある」、「教材補充の部分が多くしめられている」などがあげられた。

## 5. 連携時に望む方法・内容について

### (1) 望む連携方法について

望む連携方法について、「連絡ノート」「報告書」「口頭」「電話」などの7項目をあげてそれぞれについて「とても当てはまる」「少し当てはまる」「どちらともいえない」「やや当てはまらない」と「全く当てはまらない」の5件法で回答を求めた。それぞれの人数の割合を求めたうえで、「とても当てはまる」と「少し当てはまる」を合わせて「当てはまる」とし、「やや当てはまらない」と「全く当てはまらない」を合わせて「当てはまらない」として集計をした。

「当てはまる」の回答の割合が最も多かった項目は、「口頭」84名中79人(94.0%)であり、次いで、「児童が行った学習プリント」74人(88.1%)、「連絡ノート」65人(77.4%)であった。

7項目とその他を含めたすべての項目について、回答の結果は次のとおりであった。

#### ① 連絡ノート

「とても当てはまる」47人(56.0%)、「少し当てはまる」18人(21.2%)、「どちらともいえない」16人(19.0%)、「やや当てはまらない」2人(2.4%)、「全く当てはまらない」1人(1.2%)だった。

「当てはまる」65人(77.4%)、「当てはまらない」3人(3.6%)だった。

#### ② 報告書

「とても当てはまる」17人(20.2%)、「少し当てはまる」21人(25.0%)、「どちらともいえない」31人(36.9%)、「やや当てはまらない」10人(11.9%)、「全く当てはまらない」5人(6.0%)だった。

「当てはまる」38人(45.2%)、「当てはまらない」15人(17.9%)だった。

#### ③ メール

「とても当てはまる」0人(0.0%)、「少し当てはまる」4人(4.8%)、「どちらともいえない」43人(51.2%)、「やや当てはまらない」12人(14.3%)、「全く当てはまらない」25人(29.8%)だった。

「当てはまる」4人(4.8%)、「当てはまらない」37

人(44.0%)だった。

#### ④ 口頭

「とても当てはまる」70人(83.3%),「少し当てはまる」9人(10.7%),「どちらともいえない」5人(6.0%),「やや当てはまらない」0人(0.0%),「全く当てはまらない」0人(0.0%)だった。

「当てはまる」79人(94.0%),「当てはまらない」0人(0.0%)だった。

#### ⑤ 電話

「とても当てはまる」2人(2.4%),「少し当てはまる」14人(16.7%),「どちらともいえない」35人(41.7%),「やや当てはまらない」10人(11.9%),「全く当てはまらない」23人(27.4%)だった。

「当てはまる」16人(19.0%),「当てはまらない」33人(39.3%)だった。

#### ⑥ 児童が行ったプリント

「とても当てはまる」42人(50.0%),「少し当てはまる」32人(38.1%),「どちらともいえない」9人(10.7%),「やや当てはまらない」1人(1.2%),「全く当てはまらない」0人(0.0%)だった。

「当てはまる」74人(88.1%),「当てはまらない」1人(1.2%)だった。

#### ⑦ 教材

「とても当てはまる」34人(40.5%),「少し当てはまる」29人(34.5%),「どちらともいえない」18人(21.4%),「やや当てはまらない」3人(3.6%),「全く当てはまらない」0人(0.0%)だった。

「当てはまる」63人(75.0%),「当てはまらない」3人(3.6%)だった。

#### ⑧ その他は8人(9.5%)だった。

その他の具体的な内容としては、「メモを机の上に置く」、「長休み、昼の休憩時等に連絡を取る」、「担任に負担がかからない程度」、「活動の動画、画像」などがあげられた。

### (2)伝えたい内容について

伝えたい内容について、「学習内容」「児童の様子」「通級での対応」「使用した教材」「使用した支援ツール」などの10項目をあげてそれぞれについて「とても当てはまる」「少し当てはまる」「どちらともいえない」「やや当てはまらない」と「全く当てはまらない」の5件法で回答を求めた。それぞれの人数の割合を求めたうえで、「とても当てはまる」と「少し当てはまる」を合わせて「当てはまる」とし、「やや当てはまらない」と「全く当てはまらない」を合わせて「当てはまらない」として集計をした。

「当てはまる」の回答の割合が最も多かった項目は、「児童の様子」84人中82人(97.6%)であり、次いで、「学習内容」と「通級での対応」80人(95.2%),「使用した教材」「児童本人の感想」71人(84.5%)であった。

10項目とその他を含めたすべての項目について、回答の結果は次のとおりであった。

#### ① 学習内容

「とても当てはまる」68人(81.0%),「少し当てはまる」12人(14.3%),「どちらともいえない」4人(4.8%),「やや当てはまらない」0人(0.0%)、「全く当てはまらない」0人(0.0%)だった。

「当てはまる」80人(95.2%),「当てはまらない」0人(0.0%)だった。

#### ② 児童の様子

「とても当てはまる」77人(91.7%),「少し当てはまる」5人(6.0%),「どちらともいえない」2人(2.4%),「やや当てはまらない」0人(0.0%),「全く当てはまらない」0人(0.0%)だった。

「当てはまる」82人(97.6%),「当てはまらない」0人(0.0%)だった。

#### ③ 通級での対応

「とても当てはまる」64人(76.2%),「少し当てはまる」16人(19.0%),「どちらともいえない」4人(4.8%),「やや当てはまらない」0人(0.0%),「全く当てはまらない」0人(0.0%)だった。

「当てはまる」80人(95.2%),「当てはまらない」0人(0.0%)だった。

#### ④ 使用した教材

「とても当てはまる」41人(48.8%),「少し当てはまる」30人(35.7%),「どちらともいえない」13人(15.5%),「やや当てはまらない」0人(0.0%),「全く当てはまらない」0人(0.0%)だった。

「当てはまる」71人(84.5%),「当てはまらない」0人(0.0%)だった。

#### ⑤ 使用した支援ツール

「とても当てはまる」36人(42.9%),「少し当てはまる」32人(38.1%),「どちらともいえない」15人(17.9%),「やや当てはまらない」1人(1.2%),「全く当てはまらない」0人(0.0%)だった。

「当てはまる」68人(81.0%),「当てはまらない」1人(1.2%)だった。

#### ⑥ 通級担任の評価

「とても当てはまる」37人(44.0%),「少し当てはまる」33人(39.3%),「どちらともいえない」13人(15.5%),「やや当てはまらない」1人(1.2%),「全

く当てはまらない」0人(0.0%)だった。

「当てはまる」70人(83.3%),「当てはまらない」1人(1.2%)だった。

⑦ 児童本人の感想

「とても当てはまる」37人(44.0%),「少し当てはまる」34人(40.5%),「どちらともいえない」13人(15.5%),「やや当てはまらない」0人(0.0%),「全く当てはまらない」0人(0.0%)だった。

「当てはまる」71人(84.5%),「当てはまらない」0人(0.0%)だった。

⑧ 児童本人の評価

「とても当てはまる」31人(36.9%),「少し当てはまる」34人(40.5%),「どちらともいえない」13人(15.5%),「やや当てはまらない」0人(0.0%),「全く当てはまらない」0人(0.0%)だった。

「当てはまる」65人(77.4%),「当てはまらない」0人(0.0%)だった。

⑨ 通級担任から学級担任へのコメント

「とても当てはまる」33人(39.3%),「少し当てはまる」27人(32.1%),「どちらともいえない」21人(25.0%),「やや当てはまらない」2人(2.4%),「全く当てはまらない」1人(1.2%)だった。

「当てはまる」60人(71.4%),「当てはまらない」3人(3.6%)だった。

⑩ 学級担任から通級担当へのコメント

「とても当てはまる」29人(34.5%),「少し当てはまる」26人(31.0%),「どちらともいえない」27人(32.1%),「やや当てはまらない」1人(1.2%),「全く当てはまらない」1人(1.2%)だった。

「当てはまる」55人(65.5%),「当てはまらない」2人(2.4%)だった。

⑪ その他が10人(11.9%)だった。

その他の具体的な内容としては、「通級担任が把握した児童本人の思いや考え方,自分の行動についての評価,理由等」,「児童の小さな変化,ほめた内容(お互いに伝え合う)通級担任と学級担任で共通理解することで,二重にほめ,自信や次のよい行動へとつなげることができる」,「子供の特性を通級担当が担任に分かりやすく伝えていくと学級での対応のヒントにな

る」,「保護者のコメント(ニーズ等)」,「保護者の思い,教育的ニーズを共有できるようにすること」,「保護者面談の内容」があげられた。

6. 連携の満足度と通級指導教室担当者の勤務状況等の関連について

勤務形態,兼務する学校数,勤務日数,特別支援学校教諭免許状の有無,特別支援教育コーディネーターの担当の有無と連携満足度について,結果を表2に示した。

(1) 勤務形態と連携の満足度の関係について

「連携がうまくいっている」と回答した割合は,自校のみの勤務の担当者は78.9%であり,兼務をしている担当者は64.6%であった。「連携がうまくいっていない」と回答した割合は,自校のみの勤務の担当者は15.8%であり,兼務をしている担当者は33.8%であった。「連携がうまくいっている」回答は自校のみの勤務の方が兼務に比してわずかに高く,「連携がうまくいっていない」と回答する割合は自校のみの勤務の方がわずかに低かった。

(2) 兼務する学校数と連携の満足度の関係について

「連携がうまくいっている」と回答した割合は,兼務校数が1校のみの担当者は65.7%であり,兼務校が2校以上の担当者は63.3%であった。「連携がうまくいっていない」と回答した割合は,兼務校数が1校のみの担当者は34.3%であり,兼務校が2校以上の担当者は33.3%であった。兼務する学校数に違いがあっても連携の満足度はほぼ同じ結果であった。

(3) 自校での勤務日数と連携の満足度の関係について

「連携がうまくいっている」と回答した割合は,自校での勤務日数が週に2日以下の担当者は65.7%であり,週に3日以上担当者は63.4%であった。「連携がうまくいっていない」と回答した割合は,自校での勤務日数が週に2日以下の担当者は34.3%であり,週に3日以上担当者は33.3%であった。自校での勤務日数に違いがあっても連携の満足度はほぼ同じ結果であった。

(4) 特別支援学校教諭免許状の有無と連携の満足度の関係について

「連携がうまくいっている」と回答した割合は,特別支援学校教諭免許状を取得している担当者は

表2 勤務状況における連携満足度

	勤務形態		兼務校数		自校勤務日数		特別支援学校教諭免許状		特別支援教育コーディネーター	
	1校	兼務	1校	2校以上	1・2日	3・4・5日	有	無	担当	担当外
連携が上手くいっている	78.9%	64.6%	65.7%	63.3%	65.7%	63.4%	67.7%	68.0%	64.3%	71.4%
連携が上手くいっていない	15.8%	33.8%	34.3%	33.3%	34.3%	33.3%	29.0%	30.2%	35.7%	23.8%
どちらともいえない	5.3%	1.6%	0.0%	0.4%	0.0%	3.3%	3.3%	1.8%	0.0%	4.8%

67.7%であり、特別支援学校教諭免許状を取得していない担当者は68.0%であった。「連携がうまくいっていない」と回答した割合は、特別支援学校教諭免許状を取得している担当者は29.0%であり、特別支援学校教諭免許状を取得していない担当者は30.2%であり、特別支援学校教諭免許状の有無に違いがあっても連携の満足度はほぼ同じ結果であった。

#### (5) 特別支援教育コーディネーターと連携の満足度の関係について

「連携がうまくいっている」と回答した割合は、特別支援教育コーディネーターである担当者は64.3%であり、特別支援教育コーディネーターではない担当者は71.4%であった。「連携がうまくいっていない」と回答した割合は、特別支援教育コーディネーターで

ある担当者は35.7%であり、特別支援教育コーディネーターではない担当者は23.8%であり、「連携がうまくいっている」回答は特別支援教育コーディネーターである担当者の方がわずかに低く、「連携がうまくいっていない」と回答する割合は特別支援教育コーディネーターである担当者の方がわずかに高かった。

#### 7. 連携の満足につながる連携の方法や内容について

連携満足度ごとの連携の方法や内容の集計結果を表3に示した。

##### (1) 学級担任との連携頻度と連携満足度との比較について

学級担任との連携頻度について、「連携がうまくいっ

表3 連携の満足度と通級指導教室担当者と学級担任との連携

	全体 (n=84)		連携がうまくいっている (n=57)		連携がうまくいっていない (n=25)	
	学校数(校)	割合(%)	学校数(校)	割合(%)	学校数(校)	割合(%)
<b>&lt;学級担任との連携頻度&gt;</b>						
毎回	53	63.1	40	70.2	12	48.0
2日に1回程度	6	7.1	5	8.8	1	4.0
3日に1回程度	1	1.2	1	1.8	0	0.0
週に1回程度	14	16.7	6	10.5	8	32.0
月に1回程度	3	3.6	2	3.5	1	4.0
学期に1回程度	0	0.0	0	0.0	0	0.0
行っていない	0	0.0	0	0.0	0	0.0
その他	7	8.3	3	5.3	3	12.0
<b>&lt;現状の連携方法&gt;</b>						
連絡ノート	55	65.5	35	61.4	19	76.0
報告書	28	33.3	25	43.9	2	8.0
メール	1	1.2	1	1.8	0	0.0
口頭	80	95.2	55	96.5	23	92.0
電話	8	9.5	7	12.3	1	4.0
児童が行った学習プリント	57	67.9	38	66.7	18	72.0
教材	29	34.5	23	40.4	6	24.0
その他	18	21.4	16	28.1	2	8.0
<b>&lt;現状の伝えている内容&gt;</b>						
学習内容	68	81.0	48	84.2	19	76.0
児童の様子	68	81.0	49	86.0	18	72.0
通級での対応	63	75.0	44	77.2	18	72.0
使用した教材	50	59.5	35	61.4	14	56.0
使用した支援ツール	28	33.3	20	35.1	8	32.0
通級担任の評価	44	52.4	29	50.9	14	56.0
児童本人の感想	32	38.1	27	47.4	5	20.0
児童本人の評価	20	23.8	16	28.1	4	16.0
通級担任から学級担任へのコメント	31	36.9	21	36.8	9	36.0
学級担任から通級担任へのコメント	19	22.6	15	26.3	3	12.0
その他	13	15.5	10	17.5	3	12.0
<b>&lt;望む連携方法&gt;</b>						
連絡ノート	65	77.4	43	75.4	22	88.0
報告書	38	45.2	33	57.9	5	20.0
メール	4	4.8	4	7.0	0	0.0
口頭	79	94.0	55	96.5	23	92.0
電話	16	19.0	14	24.6	2	8.0
児童が行った学習プリント	74	88.1	51	89.5	23	92.0
教材	63	75.0	43	75.4	20	80.0
その他	8	9.5	6	10.5	1	4.0
<b>&lt;望む伝えたい内容&gt;</b>						
学習内容	80	95.2	54	94.7	24	96.0
児童の様子	82	97.6	55	96.5	25	100.0
通級での対応	80	95.2	54	94.7	24	96.0
使用した教材	71	84.5	47	82.5	23	92.0
使用した支援ツール	68	81.0	44	77.2	22	88.0
通級担任の評価	70	83.3	47	82.5	21	84.0
児童本人の感想	71	84.5	49	86.0	21	84.0
児童本人の評価	65	77.4	44	77.2	20	80.0
通級担任から学級担任へのコメント	60	71.4	43	75.4	16	64.0
学級担任から通級担任へのコメント	55	65.5	39	68.4	15	60.0
その他	10	11.9	6	10.5	3	12.0



ている」担当者では、「毎回」が57人中40人(70.2%)であり、「連携がうまくいっていない」担当者では25人中12人(48.0%)であった。連携がうまくいっている担当者の方がうまくいっていない学校よりも「毎回」の連携を行う割合が高かった。

## (2) 現状の連携方法と連携満足度との比較について

現在行っている連携方法について、「連携がうまくいっている」担当者では、「口頭」が57校中55人(96.5%)であり、次いで「児童が行った学習プリント」38人(66.7%)、「連絡ノート」35人(61.4%)であった。「連携がうまくいっていない」担当者では「口頭」が25校中23人(92.0%)であり、次いで「連絡ノート」19人(76.0%)「児童が行った学習プリント」18人(72.0%)であった。通級指導教室担当者と学級担任との連携方法は、連携の満足度に関係なく、ほぼ同じ結果であった。

## (3) 現状の伝えている内容と連携満足度との比較について

現在通級担当者が学級担任に伝えている内容について、「連携がうまくいっている」担当者では、「児童の様子」が57校中49校人(86.0%)であり、次いで「学習内容」48人(84.2%)、「通級での対応」44人(77.2%)であった。「連携がうまくいっていない」担当者では「学習内容」が25校中19人(76.0%)であり、次いで「児童の様子」「通級での対応」18人(72.0%)であった。通級指導教室担当者と学級担任との伝えている内容は、連携の満足度に関係なく、ほぼ同じ結果であった。

## (4) 望む連携方法と連携満足度との比較について

望む連携方法について、「連携がうまくいっている」担当者では、「口頭」が57校中55人(96.5%)であり、次いで「児童が行った学習プリント」51人(89.5%)、「連絡ノート」「教材」43人(75.4%)、「報告書」33人(57.9%)であった。「連携がうまくいっていない」担当者では「口頭」「児童が行った学習プリント」が25校中23人(92.0%)であり、次いで「連絡ノート」22人(88.0%)、「教材」20人(80.0%)であった。

「すぐに」「短時間で」「手軽に」連携を行う方法である「口頭」「児童が行った学習プリント」「連絡ノート」「教材」については、「連携がうまくいっている」「連携がうまくいっていない」どちらの学校も同様に望んでいる結果が得られた。「報告書」については、「連携がうまくいっている」33人(57.9%)に比べて、「連携がうまくいっていない」5人(20.0%)であり、連携の満足度が高い担当者の割合が高かった。

## (5) 望む伝えたい内容と連携満足度との比較について

通級担当者が学級担任に伝えたい内容について、「連携がうまくいっている」担当者では、「児童の様子」が57校中55校人(96.5%)であり、次いで「学習内容」「通級での対応」54人(94.7%)、「児童本人の感想」49人(86.0%)、「使用した教材」「通級担当の評価」47人(82.5%)、「使用した支援ツール」「児童本人の評価」44人(77.2%)であった。

「連携がうまくいっていない」担当者では「児童の様子」が25校中25人(100.0%)であり、次いで「学習内容」「通級での対応」24人(96.0%)、「使用した教材」23人(92.0%)、「使用した支援ツール」22人(88.0%)、「通級担任の評価」「児童本人の感想」21人(84.0%)、「児童本人の評価」20人(80.0%)であった。

「連携がうまくいっている」「連携がうまくいっていない」いずれも、望む伝えたい内容はほぼ同じ結果であった。

## (6) 連携方法の現状と望む方法の比較について

「連携がうまくいっている」担当者において行われている連携の方法は、「口頭(96.5%)」「児童が行った学習プリント(66.7%)」「連絡ノート(61.4%)」であり、望む連携方法は、「口頭(96.5%)」「児童が行った学習プリント(89.5%)」「連絡ノート(75.4%)」「教材(75.4%)」「報告書(57.9%)」であった。

「連携がうまくいっていない」担当者において行われている連携方法は、「口頭(92.0%)」「連絡ノート(76.0%)」「児童が行った学習プリント(72.0%)」であり、望む連携方法は、「口頭(92.0%)」「児童が行った学習プリント(92.0%)」「連絡ノート(88.0%)」「教材(80.0%)」であった。

「連携がうまくいっている」「連携がうまくいっていない」いずれも、連携の方法については、現状と望む方法はほぼ一致しており、「すぐに」「短時間で」「手軽に」「可視化して」連携を行う方法があげられた。情報をより詳細に伝える方法である「報告書」の実施は現状では割合が低いが、望む方法として挙げられている。また、どの項目も現状よりも望む割合の方が高い結果が得られた。

## (7) 伝えている内容の現状と望む伝えたい内容の比較について

「連携がうまくいっている」担当者が現在学級担任に伝えている内容は、「児童の様子(86.0%)」「学習内容(84.2%)」「通級での対応(77.2%)」であり、担当者が学級担任に伝えたい内容は、「児童の様子(96.5%)」「学習内容(94.7%)」「通級での対応



(94.7%)」「児童本人の感想(86.0%)」「使用した教材(82.5%)」「通級担当の評価(82.5%)」「使用した支援ツール(77.2%)」「児童本人の評価(77.2%)」であった。

「連携がうまくいっていない」担当者が学級担任に伝えている内容は、「学習内容(76.0%)」「児童の様子(72.0%)」「通級での対応(72.0%)」であり、担当者が学級担任に伝えたい内容は、「児童の様子(100.0%)」「学習内容(96.0%)」「通級での対応(96.0%)」「使用した教材(92.0%)」「使用した支援ツール(88.0%)」「通級担任の評価(84.0%)」「児童本人の感想(84.0%)」「児童本人の評価(80.0%)」であった。

「連携がうまくいっている」「連携がうまくいっていない」いずれも、現状と望む内容はほぼ一致している。現状の「児童の様子」「学習内容」「通級での対応」といった通級指導教室における児童の実態や活動内容の「伝達」に加えて、「児童本人の感想」「使用した教材」「通級担当の評価」「使用した支援ツール」「児童本人の評価」といった「活動の意図や児童の内面の変容などより具体的な児童を支えるための情報共有」が望む内容として挙げられている。また、どの項目においても現状よりも望む割合の方が高い結果が得られた。

## IV. 考察

### 1. 求められる通級指導教室担当者の専任制

今回の調査において、自校のみの担当者の方が連携の満足度が高いという結果が得られたにもかかわらず、A県内では兼任をする通級指導教室担当者が半数以上を占めた。相原ら(2011)の先行研究では、「すべての学校に通級指導教室を設置することが第一に求められる」と述べられている。このことから、より連携を上手く行っていくためには専任の通級指導教室担当者を設置することが求められると考えられる。文部科学省の調査結果やA県内の動向より、自校の通級指導教室の数が増えてきているため、この問題への対応は進みつつあるといえる。

### 2. 連携の方法及び内容について

調査結果から、連携の方法として、連携にかかる時間が少ない中で、時間を取られず「短時間」に、伝えたいことを「すぐに」伝える方法が求められていることが示された。口頭で伝えることで「すぐに」情報交換を行うことができ、加えてファイルを用いることで「情報が可視化」される。ファイルを見て分かるよう

なことは時間をかけずに済むため、結果的に「短時間に」必要な内容を伝えることができると考えられる。

担当者が学級担任に伝えており、今後も伝えたいと望む内容としては、「学習内容」が多くあげられた。学習指導要領に「学習の進捗状況等の情報交換が求められている」と記されていることと一致している。

一方で、通級指導教室における児童の実態や活動内容の「伝達」にとどまらず「活動の意図や児童の内面の変容などより具体的な児童を支えるための情報共有」を望んでいる結果も示された。連携が定着する中で、より多くの内容を伝える「連絡ノート」などの導入も進めていけるとよいのではないだろうか。他にも動画等のデータを用いたり、保護者からの情報交換がなされたりするとよりよい連携になるのではないかと考える。

負担なく継続的な連携としていくためには、「すぐに」「短時間で」「手軽に」行うことができ、かつ「可視化して」確実に情報を共有できる連携の検討が必要である。

今回は限られた地域での調査結果のため、本結果が全国的な動向とは言い難い。よって、今後は広い範囲での調査や、通級指導教室担当者以外の教員の意向を調査する必要があると考えられる。

## V. 謝辞

本アンケート調査にご協力いただきました小学校の皆様から感謝致します。

## 引用・参考文献

- 相原章子・武田篤(2011):LD等を対象とする通級指導教室の現状と課題—学級担任との連携に視点をあてて—。秋田大学教育文化学部教育実践研究紀要, 33, 67-77.
- 藤川雅人・石井尚美・落合正彦・佐藤貴宣・柳沼泰子・藤井和子(2015):通級指導教室担当教師と通常の学級担任との連携—連携の実態と情報交換の方法との関連性を中心に—。特殊教育学研究, 53(3), 165-174.
- 市川恵子・江田裕介(2017):発達障害がある生徒に対する通級による指導—保護者との連携に基づいて—。和歌山大学教育学部紀要, 68(1), 259-264.
- 文部科学省(2017):小学校学習指導要領。
- 文部科学省(2017):小学校学習指導要領解説。

文部科学省（2019）：令和元年度通級による指導実施状況調査結果について。 [http://www.mext.go.jp/content/20200317-mxt\\_tokubetu01-000005538-02.pdf](http://www.mext.go.jp/content/20200317-mxt_tokubetu01-000005538-02.pdf)（2021年4月29日閲覧）

岡本邦広（2014）：学校における行動問題を示す発達障害児の指導・支援に関する連携方法の現状と課

題。特殊教育学研究，52（3），217-227.

都築繁幸・長田洋一（2016）：小学校通級指導教室と通常の学級の連携に関する一考察—日本LD学会における研究動向—。障害者教育・福祉学研究，12，121-129.